

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.135

2025.12.30 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.135 目次

WRV 愛知県支部の発足について	2
愛知県支部長就任のご挨拶	3
獣医学の力で奄美の野生動物を救う～奄美群島初の野生動物専門治療施設～	4-6
埼玉県丘陵部でのアライグマ根絶の取り組みと課題①	7-10
アイスランドで蚊を確認	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

WRV 愛知県支部の発足について

W R V 事 務 局

この度、WRVの新たな支部として、「愛知県支部」が発足することになりました。

支部長に就任いただくのは、現在、愛知県岡崎市内の動物病院に勤務されている石原亜美（つぐみ）先生です。

石原先生は嘗て、当協会の副会長および大阪支部長である中津賞先生が院長をされていた中津動物病院に勤務され、様々な野生動物を含めた幅広い診療・治療実績をお持ちで、また海外での活動経験もあり、これまで環境省の「油等汚染対策水鳥救護研修」や、JICAの「海上保安実務者のための救難・環境防災研修」においても講師を務めていただいております。

そうした中、愛知県において新たな活動を模索されたいとのことから、中津先生からのご推薦もあり、新たな支部の発足に繋がった次第です。

この愛知県支部も含めて、現在、それぞれ活動を展開しているWRVの支部、およびその役員について、ここで改めて以下に掲載しておきたいと思います。

- 東京都支部 支 部 長：小松泰史（新ゆりがおか動物病院 院長）
副支部長：大窪武彦（おおくぼ動物病院 院長）
事務局長：箕輪多津男（WRV事務局長）
監 事：高橋恒彦（新宿動物病院 院長）
- 神奈川支部 支 部 長：皆川康雄（東京環境工科専門学校 特任教員）
副支部長：片野理恵（あじさい動物病院 副院長）
事務局長：箕輪多津男（WRV事務局長）
監 事：加藤卓也（日本獣医生命科学大学 准教授）
- 岐阜県支部 支 部 長：大塩哲也（おおしお動物病院 院長）
事務局長：杉田泰朗（杉田動物病院 院長）
- 愛知県支部 支 部 長：石原亜美（WRV研修講師）
- 大阪支部 支 部 長：中津 賞（浅香山動物病院 顧問）
- 宮崎支部 支 部 長：隅田賢峰（隅田動物病院 院長）
- 鹿児島支部 支 部 長：玉井勘次（たまい動物病院 院長）

では、愛知県支部長にご就任いただいた石原亜美先生より、新任のご挨拶を頂戴しましたので、次ページに掲載させていただくことにいたします。



WRV愛知県支部長就任のご挨拶

WRV愛知県支部長 石原 亜美

この度WRV愛知県支部を設立し、支部長として就任する運びとなりました。僭越ながらこれまでの歩みを少しお話させていただきます。

私は子供の頃から野生動物の番組などを観ることが好きで、大阪の街で生まれ育った私にとって、人間界とは隔たれた「野に生きる動物たち」は一種の憧れでした。ちょうど平成初期、環境汚染や乱獲により数を減らした動物たちのレッドデータリストが日本でも取り上げられ始めた頃で、鳥獣類が絶滅の危機にあることを知ったときの衝撃と焦燥感は、今も覚えています。子供ながらの正義感から、「これらの絶滅を防がなければならない」と強く感じました。

獣医学科を志したのは、高校の生物を学ぶ中で生命の動的平衡に興味を持ったこと、そして獣医師としての能力が、野生動物保全に役立つかもしれないと感じたことが理由です。

2016年に鳥取大学農学部獣医学科に入学後は、いくつかの野生動物保護施設にて、見学・研修させていただきました。

中でも強く印象に残っているのは、若かった私が初めて一人で渡航した南アフリカでの経験です。トランジットを含め27時間かけ、ポートエリザベスという南端の小さな町に向かいました。現地の獣医師による2週間の実習に参加しましたが、先生の英語が全く聞き取れず、同室だったスコットランドの獣医学生に通訳してもらいながら学びました。

扱った動物はアンテロープ類、シマウマ、シロサイ、チーター、サーバルなどで、ヘリから麻酔をかけ、地上班が軽トラで追いかけて麻酔のかかった動物を積んで道なき道を運ぶという仕事为主でした。移送中に動物が覚醒することも多く、サバンナの悪路を走る軽トラの荷台で動物にしがみついてケタミンを静注するのが実習生の役目でした。（その背景には南アフリカ特有の事情があるため、ここでは割愛します。）一番ハードな日には14頭のニャラを追い、藪をかき分けて傷だらけになりながら捕獲し、疲労困憊で度々睡魔に襲われますが、先生の「動物用のオピオイドが傷に一滴落ちると人間は死んでしまう」という言葉を思い出して、不安に駆られたものです。必死の実習でしたが、終了後に、夕日の中連れて行ってもらったサバンナクルーズでの景色と動物の美しさは決して忘れません。

さて、まだまだ話のネタとしてボルネオ島空爆事件、アメリカ宿なし事件、ニュージーランドでイルカを追いかけて車のタイヤがパンクした話等あるのですが、詳しく知りたい方はぜひ直接お声がけください。

卒業後は鳥類臨床に特化したいと考え、中津賞先生の病院で勉強する傍ら、先生が力を入れておられたWRVの活動にも参加して参りました。現在は愛知県にて小動物臨床の勤務医として働きつつ家事育児に追われる日々ですが、このような活動は続けていくことが大切だと感じています。

お近くにお住まいの方は、ぜひお力添えをいただければ幸いです。

皆様と、油汚染水鳥救護研修会などでお会いできる機会を楽しみにしております。

獣医学の力で奄美の野生動物を救う

～奄美群島初の野生動物専門治療施設～

奄美野生動物医学センター・センター長 新 屋 惣

【奄美大島の独自の生態系と高い生物多様性】

奄美大島は鹿児島県に属する離島で、鹿児島本土と沖縄本島のおよそ中間に位置します。島の総面積の80%以上が森林地帯である、険しい山々が連なる「森の島」です。この豊かな森に、地球上でこの地域にしかいない「固有種」が多く生息しています。固有種の中で代表的な例が、アマミノクロウサギです。特別天然記念物に指定されている奄美群島にしか生息しないウサギで、頭や耳が小さく、ウサギの中で最も原始的な姿を残しています。その他にも、アマミトゲネズミ、ケナガネズミ、ルリカケス、オオトラツグミ、アマミヤマシギなど多くの固有種や希少種が生息しています。国土面積の0.2%にしか満たない小さなこの島に、国内で観察できる13%もの生物種が確認でき、高い生物多様性が見られます。亜熱帯の自然景観と豊かな生物多様性が評価され、2021年には、ユネスコの世界自然遺産に登録されました。

【奄美大島の野生動物に迫る脅威】

奄美大島の野生動物は、人間活動による様々な影響を受けています。

【①外来種】過去には、移入されたマングースの捕食により、島の貴重な野生動物の個体数が減少しました。環境省等がマングースの大規模な捕獲を進めた結果、2024年に根絶宣言が発表されました。その一方で、新たに問題視されているのが野生化したネコ（ノネコ）です。2015年の推定では、島内に600～1200頭のノネコが生息するとされており、奄美の固有種を捕食する姿が確認されています。

【②ロードキル】マングースの根絶や森林の回復により、固有種の個体数は近年回復傾向にあります。これに伴い、野生動物が自動車と衝突する事故（ロードキル）の発生が急激に増加しています。2023年度には、クロウサギで147件の事故死が確認されており、他の動物種も考慮すると、膨大な野生動物が犠牲になっていると考えられます。



図1: 大腿骨を骨折したケナガネズミに対して、整復手術を実施した。回復後、野生復帰した。

【③感染症】細菌やウイルス、寄生虫などの病原体が野生動物に影響を与える場合もあります。近年注目されているのが、外来種が宿主となり、本来存在しない地域に持ち込まれた「外来病原体」です。奄美大島においても、ネズミ類や貝類などの外来種が実際に多くの病原体を持ち込み、固有種に感染を広めていることが明らかになっています。一例として、ケナガネズミにおける広東住血線虫、アマミノクロウサギにおけるトキソプラズマ感染が複数報告されています。

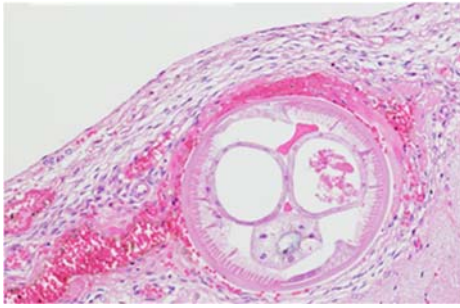


図 2：神経症状を呈し治療を受けたケナガネズミの脳の病理画像。外来病原体である広島住血線虫の寄生が確認された。

【④その他】農薬に暴露され中毒症状になる、農業用ネットや釣り糸、ネズミ駆除用粘着シートに絡まる、窓ガラスに衝突するなど、他にも様々な人為的要因で、奄美大島の野生動物が命を落としています。



画像 3：ネズミ駆除用の粘着シートに絡まったルリカケス



画像 4：イノシシ用のくくり罠に錯誤捕獲され衰弱したアマミノクロウサギ

上記の要因で負傷・衰弱した野生動物は、野生復帰を目標として、島内の施設にて治療を受けています。保護される野生動物の症例数は、直近 5 年間で 2 倍以上（年間 100 件程度）になっています。



画像 5：交通事故による脛骨骨折したサシバを手術後に野生復帰させた

【奄美野生動物医学センターの設立】

これまでは、当センターが連携している島内の動物病院にて治療を行ってきましたが、病原体を保有している可能性のある野生動物が、ペットや飼い主のいる動物病院に収容される衛生的問題や、十分なスペースや静かな環境を提供できず、野生動物にストレスを与えるという問題がありました。また、ペットの診療が優先的になるため、野生動物の治療が後回しになりがちでした。これらの問題を解決するために、施設や人材を動物病院から分離した体制が必要だと考え、野生動物専門の治

療収容施設である「奄美野生動物医学センター」が、2024年に設立されました。

当センターでは、手術機器、検査機器、ICU、飼育室を整備しています。これまでは十分な飼育設備が島内に無かったため、入院症例や終生飼育個体は狭いケージでの管理を余儀なくなれていましたが、ストレスの少ない環境下での入院・飼育管理が可能となりました。



画像6：奄美野生動物医学センターで飼育されているルリカケス

治療中や飼育中に得られたサンプルや知見は、学術研究に活用しています。各研究機関と共同で解析を行い、英語論文や学会での発表を毎年実施しています。現在は、野生動物が保有する病原体の解析や環境汚染物質の検出をメインに研究を実施しています。

治療施設に運ばれてくる個体は、不幸中の幸いで、運よく保護されたものの一部です。その背景には、より多くの犠牲になっている個体があります。野生動物への被害を予防するためには、島内の人々の野生動物に対する関心を向上させることが重要だと考えています。そこで、野生動物や獣医学に興味を持っていただけるよう定期的な講演会の開催、学校での授業等を実施しています。特に、奄美大島出身の野生動物保全に関わる人材の養成のため、子どもを対象とした教育活動に力を入れています。授業や体験学習によって野生動物や動物診療に興味をもち、獣医師や動物看護師を目指す学生が増えた印象を受けています。

当センターでは、「獣医学の力で奄美の野生動物を救う」というスローガンを設定しています。「獣医学で救う」とは単に目の前の個体を治療して治す事だけではなく、研究で得た知見を活用して個体群や生息環境を守る事や、教育啓蒙により人々の野生動物への興味関心を醸成する事も含みます。救護、学術研究、教育啓蒙の3本柱で活動を展開しています。

【今後の展望】

奄美の固有種の生息数は増加しており、搬入される症例数も今後増加する事が予想されます。野生動物との共存のために、現場の獣医師が担う役割も多くなると考えられます。当センターもその役割や責任に応じて進化する必要があります。

野生動物の臨床は、伴侶動物と比較するとまだまだ発展途上です。現在、診断技術や治療手技の向上のため、大学病院やエキゾチック獣医師との連携を進めています。島内での医療体制を整備するとともに、高度医療や専門医のスキルを野生動物に応用する事で、臨床レベルの向上を試みています。また、野生復帰前のリハビリ等もできる広大な治療研究施設の整備も進めています。

これからも自治体や関係機関と連携して、野生動物医学の可能性を拡充できる活動を展開していきます。

埼玉県丘陵部でのアライグマ根絶の取り組みと課題①

WRV理事／埼玉県生態系保護協会比企支部長 小山 正 人

●埼玉県のアライグマの状況

2007年、アライグマによる農業被害、生態系被害防止のために埼玉県アライグマ防除実施計画が策定され、県内でアライグマ捕獲が始まりました。初年度は34頭の捕獲数でしたが、右肩上がりですぐに捕獲数が増加していき、2022年には年間10000頭を超え、2024年度は1万3千頭あまりとなりました。今年4月6日の北海道新聞1面トップの記事に、「箱わな中心に3万頭超を捕獲、農業被害は3倍に」という見出しがついていました。北海道の10分の1の面積の埼玉県が1万頭超ですから、いかに本県のアライグマが高密度に生息しているかという事が容易に想像できます。

アライグマは、1977年にテレビ放送されたアニメの影響で、ペットとしてたくさん輸入されるようになりました。私はその頃8歳でしたが、北海道で毎週日曜日に放送を見ていたのを覚えています。このアニメの最終回で、主人公はアライグマを野生に返します。その影響かもしれませんが、生後5か月ほどで大人と同じ大きさになり、野性味が出てきたアライグマを一般の家庭では飼いきれなくなり、野外に放すということが行われました。埼玉県では、東京で飼われていたアライグマが関越自動車道の高坂サービスエリア（埼玉県比企郡鳩山町）で捨てられ、野外で増え始めました。原産地である北米のアライグマは、湿地や川、池や用水路などの水場があり、樹木の多いところを好み、休息や繁殖に必要な巣穴や食べ物が手に入るところを生息地としています。埼玉県中央部の比企地域は、ため池を使った谷津田農法が今でも行われています。ため池、谷津田、斜面林を特徴とする丘陵地がまさにアライグマの生息適地であったため爆発的に増えることになり、埼玉県で捕獲が始まった当初は、県全体の捕獲数の半数近くが比企地域で獲れたアライグマでした。今でも3割は、比企地域で捕獲されています。

●埼玉県生態系保護協会東松山・鳩山・滑川支部でアライグマ捕獲を開始

2016年に、私たちが生きもの調査を行っていた鳩山町の熊井の森に自動撮影カメラを設置したところ、タヌキやアナグマ、イタチの他にアライグマが頻繁に写っていることがわかりました。そして、その年の7月末、野鳥調査をしてる時に、母アライグマ1頭とその子供6頭の親子と遭遇しました。子供のアライグマは、人間に驚いて木の上にするすると器用に登り、上から私の方を注目していました。このような日中にアライグマと遭遇するというのは、相当の数が周辺に生息していることが疑われ、自分たちで捕獲をする必要があるのではないかと考えるきっかけとなりました。そして2016年の10月から、2台の箱わなを設置して捕獲を開始しました。

アライグマの捕獲は、被害のあったところで行う被害防除だけでなく、被害のないところにも広くワナを設置する計画的防除の考え方が重要です。そのためにも捕獲する住民を増やすことが必要だと考え、埼玉県庁、鳩山町、埼玉県生態系保護協会東松山・鳩山・滑川支部の共催でアライグマ捕獲従事者研修会を2017年2月に開催しました。講師として、埼玉県農業技術研究センターで野生動物による農業被害対策の

研究をしていた古谷益朗さんと、NPO法人三浦半島生物多様性保全代表の天白牧夫さん（2023年4月に横須賀市議会議員に当選）に講演していただいたところ、110名以上の参加者があり、関心の高さがうかがえました。



鳩山町で開催したアライグマ捕獲従事者研修会

講師をしていただいた古谷先生の講演内容をもとに、普及啓発のためのチラシ2種も作成しました。また、アライグマの見回り時に、ロードキルの犠牲になった動物を目撃することがよくありますので、そうした動物（アライグマ、タヌキ、キツネ、ハクビシン、ノウサギ等）をはく製にしてイベントの際に展示を行い、アライグマとの違いを比較してもらったりしました。



2種類の普及啓発用のチラシ

●支部のアライグマ捕獲の実際

2017年3月から、支部が生きもの調査のフィールドとしていた広さ100ヘクタールほどの鳩山町熊井の森の8ヶ所に、箱わなを仕掛けてアライグマの捕獲を始めました。鳩山町役場が貸してくれた箱わなは1台だけでしたが、自然保護NPOから中古のものを10台ほど譲り受けることができたので、広範囲にわなを設置

することができました。アライグマは水路を移動する習性があるため、水辺や沢の出口を中心に自動撮影カメラでアライグマが写った場所など、8箇所に仕掛けました。餌は、あんドーナツとキャラメルコーンです。それを水切りネットに入れて、箱わなの天井からぶら下げました。翌朝の見回りは私を含めた3人で交代で行い、基本的に休みなしで年間365日間の捕獲を行いました。アライグマが入っていなかった場合は、餌を新しいものに変えます。アライグマが捕獲されていた場合は、近づかずそのままにしておいて、私に電話連絡をしてもらいます。連絡を受けた私は、麻酔薬の準備をして現場に直行します。大体、現場まで30分くらいかかります。現場に到着したらそーっと近づいて、箱わなの外から静かに注射をします。アライグマはおとなしく丸まっているだけなので、脅かさなければ保定せずに注射できます。こちらに向かって威嚇したり、攻撃してくることはほとんどありません。麻酔薬は、ミダゾラム2.0ml、メドミジン0.2ml、ブトルファノール0.2mlを混合して筋肉内に注射します。稀にじっとしていない個体がありますが、保定する場合はロープ柵用の金属製の杭（太さ1cmで長さ1.5m程）でアライグマの体を網に押し付け、肩のあたりに筋肉注射をします。5分ほどしてしっかり麻酔がかかったら、まず心臓内から採血をし、塩化カリウム5mlを心内投与して安楽殺処置をします。動物になるべく苦痛を与えない安楽殺方法として、環境省のマニュアルでは獣医師による2段階麻酔法が推奨されています。その後、各部位の計測（全長、尾長、頭胴長、後足長、耳長、首囲、胸囲、胴囲、腰囲、ボディコンディションスコア）、写真撮影、マダニの採取をします。最後に箱わなに新しい餌をセットし、その日から再び捕獲を開始します。アライグマの死体は90リットルのビニール袋に収納して車に積んで、病院に持ち帰ります。見回りから安楽殺処置までの一連の作業を終えて動物病院の診察開始の9時までに戻ってこなくてはならないので、常に日の出とともに行動を開始していました。病院にアライグマを持ち帰った後は、体重測定、X線撮影をして年齢判定をします。大まかに5～11か月齢、12～23か月齢、24か月齢以上に分けます。メス成獣の場合は、解剖して大網と子宮の重量測定、及び胎盤痕により出産数を判定します。妊娠中であった場合は、胎児の頭臀長と体重を測定します。その後、自治体のごみ焼却施設へ搬入します。

アライグマは、生後5か月くらいまで母親や兄弟と一緒に生活をします。そのため、幼獣がかかった場合は、箱わなを複数台設置して他の兄弟や親の捕獲を2週間ほど試みます。母親が先にかかることも多く、その場合は胎盤痕で子どもの数を推定します。アライグマの平均産子数は3～4頭、最大6頭くらいです。



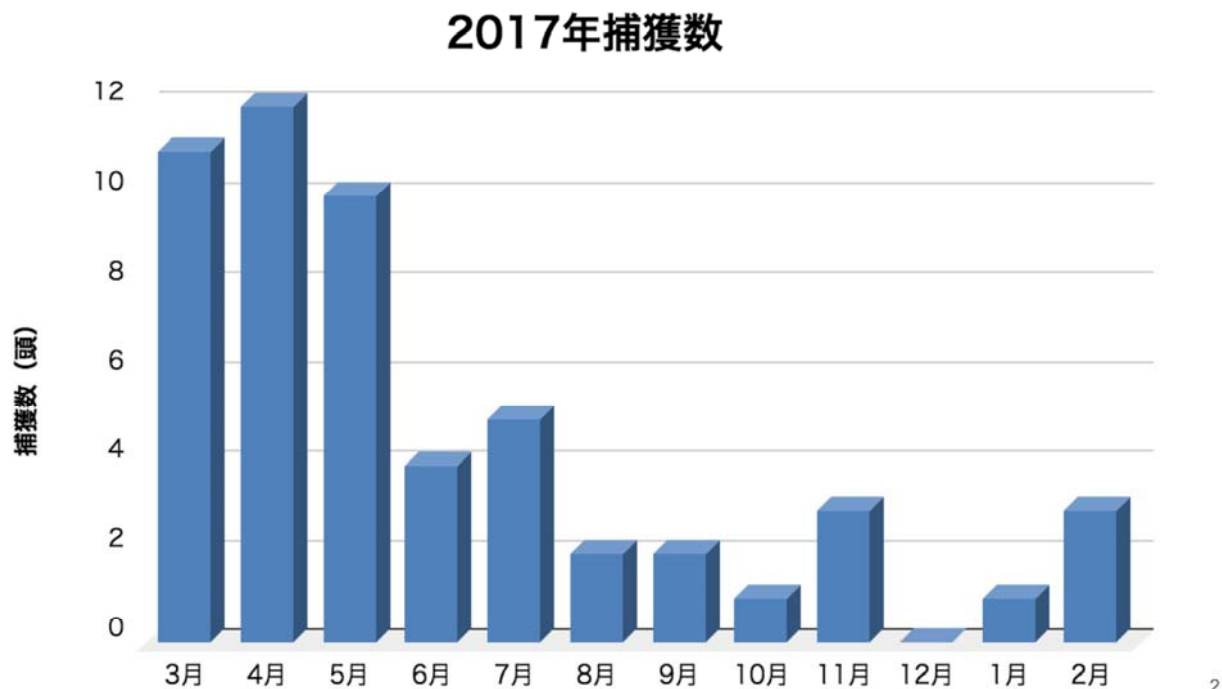
丸まっておとなしくしているアライグマ



母親がわなにかかり離れられない子供アライグマ

●アライグマ捕獲の成果

初年度の2017年度は54頭捕獲でき、2年目の2018年度は59頭捕獲しました。2017年と2018年はほぼ捕獲数
が同じだったのですが、森の外周部の箱わなと中心部の箱わなで獲れ方に違いがみられました。



そこで、森の辺縁部4か所と中心部4か所に分けて集計してみることにしました。その結果、初年度はどの箱わなも万遍なくかかっていたのですが、約1年間の捕獲で森の中心部ではかからなくなってきた、森の外周部の箱わなに若いオスがかかることが多くなりました。また、2017年3月と4月に妊娠または出産直後のメスが集中的にかかったのも、その後幼獣はほぼかからなくなりました。3年目の2019年は森の辺縁部でオスだけが若干捕まるようになり、森の中心部ではほぼ捕まらなくなりました。アライグマのメスは、出生地である母親の行動圏の近くに自らの行動圏を確保しますが、オスは親離れすると縄張り求めて遠くに移動します。森の辺縁部でオスだけがかかるようになったという事は、森の中心部にアライグマがいなくなり、他所から遠征してきた若いオスが捕獲されていることを意味します。このように短期でほぼゼロになったのは、3月～5月の妊娠・出産期に、メスを大量に捕獲したことが大きく影響していると思います。ほとんど捕まらなくなってしまったので、2019年度からは7月から10月までの4か月間は捕獲を休むことにしました。

私たちのアライグマ捕獲の試みの結果、100haの森林に8箇所箱わな設置し、2～3年毎日捕獲すればほぼ根絶できることがわかりました。結局、2017年から2022年までの6年間で計390頭捕獲しました。適切な捕獲圧をかければ減らせるが、手を緩めると周囲から侵入してくることもわかりました。そのため、地域全体で徹底して、短期集中型で一旦ゼロに近づけようという取り組みが必要です。

アイスランドで蚊を確認

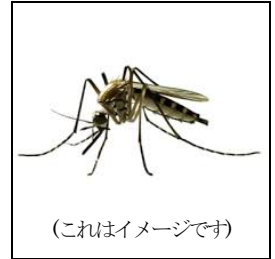
2025 年 10 月に、北欧の島国であるアイスランドにて、初めて蚊の生息が確認されたとの情報が流れました。私もかなり以前のことで、アイスランドでオーロラや水鳥類の観察を楽しんだ経験がありますが、蚊の存在がニュースになるとは思ってもみませんでした。

実は南極大陸を除くと、世界中の国の中で蚊の生息が確認されていなかったのは、アイスランドのみだったようで、そのことで特にヨーロッパ諸国では注目を浴びたようです。これまでも、地元の空港に出入りする飛行機内では蚊が確認されたことはあるようですが、国内の野外で確認されたのは全く初めてとのことで、*Culiseta annulata* という種のようなようです。これは、日本には生息していない種であると思われます。

アイスランドにこれまで蚊の生息が確認されなかったことの原因については、いくつか考えられるようですが、特に成虫に至るまでの期間を水たまりで過ごすことが必要なため、野外の淡水の水場が凍結と溶解を繰り返す変化の激しい気候が、最も大きかったものと見られています。しかし、今年のアイスランドは、5月の段階で気温が 20℃を超える日が続き、これまでの史上最高気温である 26.6℃も記録し、それから 10 月に至るまで例年にない高温状態が続いていたようで、そのことが、蚊の生息を呼び起こしたことは否定できないようです。

今後、新たに蚊がアイスランドに定着するかどうかはわかりませんが、いずれにしても地球温暖化の影響というのが、こうした蚊のような昆虫の動向にも表れているのではと、考えさせられた次第です。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)



※前号(No.134)の 15 ページに掲載した「羽山伸一先生を悼む」の記事におきまして、先生の享年を「65 歳」と記してしまいましたが、正しくは「64 歳」でした。ここに謹んでお詫び申し上げ、訂正させていただきます。(箕輪)

【 事務局より寄付のお礼 】 寄付ご協力者(敬称略) (令和 7 年 9 月 1 日から令和 7 年 11 月 30 日)

○神奈川支部 2025.11.10 山崎久美 10,000 円

事務局日誌 2025.9.17～2025.12.14

=== 9 月 ===

19: 令和 7 年度わいわいサロン (オンライン) [神奈川支部]	対応: 皆川
19,28: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応: 皆川
23: 生物多様性セミナー (川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部]	対応: 皆川
23: 夢見ヶ崎動物公園登録リハビリテーター勉強会 (川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部]	対応: 皆川
25: 青色申告会奨励会 (練馬区青色申告会事務局)	対応: 新妻
26~28: 第 31 回日本野生動物医学会大会 (アイーナ・いわて県民情報交流センター)	対応: 加藤、小山、箕輪
29: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部]	対応: 皆川
30: 日本獣医学会 (Web 会議)	対応: 新妻
30: WRV ニュースレター No.134 発行	対応: 小松、箕輪、二階堂

=== 10 月 ===

01: 令和 7 年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」関係三団体合同報告会 (Web 会議)	対応: 箕輪
02: 令和 7 年度山梨県アライグマ捕獲従事者養成講習会 (山梨県庁防災新館)	講師: 加藤
02~03: 第 1 回油等汚染事故対策水鳥救護研修 (水鳥救護研修センター)	対応: 加藤、新妻、皆川、箕輪、二階堂
04: 王禅寺ふれあいまつり (王禅寺ふるさと公園) [神奈川支部]	対応: 皆川
04: 独協 39 会研修会 (インテリジェント・ルコ)	出席: 新妻
05: 第 11 回稲城ふれあい保健医療まつり (稲城市オーエンス健康プラザ)	対応: 小松
06: 第 3 回東京都獣医師会理事会 (東京都獣医師会会議室)	出席: 小松、中川、高橋

06：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習（講義：東京環境工科専門学校） 対応：皆川
 07：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習（水鳥救護研修センター） 対応：皆川、箕輪、二階堂
 15,29,31：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応：皆川
 18～19：第46回動物臨床医学会年次大会（大阪国際会議場） 対応：田向、箕輪
 23：令和7年度山梨県アライグマ捕獲従事者養成講習会（山梨県庁防災新館） 講師：加藤
 25：(NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川支部] 対応：皆川
 29～31：ヤマザキ動物看護大学実習用ハト貸出 [神奈川支部] 対応：皆川
 30：NPO 法人ウッドデッキシンポジウム2025（北海道大学・Zoom ウェビナー併用） 対応：小山

=== 11月 ===

01～03：金沢動物園 Zoo To Wild Fes Autumn（横浜市立金沢動物園） [神奈川支部] 対応：皆川
 01～02：ジャパンバードフェスティバル（千葉県我孫子市） 対応：箕輪、二階堂
 02：稲城市防災訓練（稲城市平尾小学校） 対応：小松
 03：秋の動物園まつり（川崎市夢見ヶ崎動物公園） [神奈川支部] 対応：皆川
 04：令和7年度SFTS（重症熱性血小板減少症候群）を学ぶ研修会（オンライン） 対応：小山
 05：テレビ朝日「スーパーJチャンネル」取材対応（日本獣医生命科学大学） 対応：加藤
 05：日本獣医学会（Web 会議） 対応：新妻
 06：千葉県アライグマ防除実施計画改定に係る有識者ヒアリング（Web 開催） 対応：加藤
 09：バードウォッチングイベント（横浜市立野毛山動物園） [神奈川支部] 対応：皆川
 11～12：第2回油等汚染事故対策水鳥救護研修（水鳥救護研修センター） 対応：小松、中津、皆川、石原、箕輪、二階堂
 11,16,27：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] 対応：皆川
 14：全国獣医師会会長会議（明治記念館） 出席：小松
 14：全国獣医師会・日本獣医師会関係者事業推進懇談会（動物感謝デー前夜祭：明治記念館） 出席：小松
 14：厚木市立玉川小学校3年生の学習指導 [神奈川支部] 対応：皆川
 15：2025 動物感謝デー in Japan（上野恩賜公園：資料配布） 対応：箕輪
 15：ふじさわ環境フェア（藤沢市民会館・前庭） [神奈川支部] 対応：皆川
 16：東京中央獣医師会学術講習会（TKP ガーデンシティ） 出席：新妻
 20：令和8年度予算編成等について(公社)東京都獣医師会要望書を小池都知事に提出(東京都庁会議室) 対応：中川、高橋、小松
 21：令和7年度適正飼育講習会（オンライン） 対応：新妻
 21：藤岡市認定農業者連絡協議会地域リーダー育成研修（群馬県・大和家） 講師：加藤
 21：第25回「野生生物と交通」シンポジウム（札幌コンベンションセンター・オンライン併用） 対応：小山
 23：神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座（講義：県民活動サポートセンター） [神奈川支部] 対応：皆川、箕輪
 30：神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座（講義：県民活動サポートセンター） [神奈川支部] 対応：皆川、加藤、金坂

=== 12月 ===

05：(公社)東京都獣医師会第2回中間監査会（東京都獣医師会会議室） 対応：小松、中川、高橋
 05：2025 年度第3回獣医疫学会担当理事・幹事会（Web 会議） 対応：加藤
 06：公開シンポジウム「動物の安楽死を考える」（日本法獣医学会・Zoom ウェビナー） 対応：小山
 06,07,11：神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座（実習：犬猫・野生動物救護センター） [神奈川支部] 対応：皆川
 07：第21回爬虫類・両生類の臨床と病理のための研究会・ワークショップ（TKP 品川カンファレンスセンター・Zoom ウェビナー併用） 講師：田向
 11：愛鳥懇話会（アークヒルズクラブ） 出席：小松、箕輪

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 135 2025.12.30 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302 TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：小松 泰史 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男